



**田中館愛橘博士 没後 60 年祭**  
**記念行事 終わる**

去る5月21日、(博士の命日) 標題のように没後60年祭に係わる記念行事が、無類の天候に恵まれて予定通り終了致しました。

墓苑に於ける墓前祭(60年祭)に引き続き、会場をシビックセンターに移し、定期総会、懇親会、特別セレモニーが催されました。

○定期総会 事務局提案の議案が全て提案通り可決され、役員改選では、発足以来ずっと会長を務めて来られた丹野会長が勇退され、副会長の小保内岩吉氏が新会長に、その他役員が若干入れ替わって次ぎのように選任されました。

会 長	小保内岩吉			
副 会 長	小保内道彦	工藤 武三	国分巖士郎	
理 事 (若干名)	大西 武夫	川又 昭男	菅 陽悦	菅原 孝平
	田中 利見	千葉 謙治	塚根 弘士	富田喜平司
	中館 真一	福勢 隆		
幹 事 (3名)	西村 久	国分 弘	佐藤 純	

※事務局 (局長 中村 誠) (局員 小守一男/佐藤綾夫)

○特別セレモニーでは

- ①神代神楽 呑香稻荷神社神代神楽保存会有志による「清め」の演舞で、鳴り物入りの極めて古式豊かな舞であった。

②DVD上映 最近になって発見された映像をDVDにしたもので、晩年の博士の生活を映したものと、福岡町葬の全貌を記録したもの

③女性コーラス 演奏は金田一「歌の集い」(曲目は次の4曲)

\*心有る 友の宴(うたげ)の 夜神楽に こだま賑おう 呑香(とんこう)の杜  
(歌) 田中館愛橘 (曲) 佐藤綾夫

\*神路山 霞の奥を 踏み分けて 訪(と)わばや木々の 花の盛りを  
(歌) 田中館愛橘 (曲) 小松 清

\*花咲かば また帰り来ん 故郷の 紅葉の山を 見つつ行くなり  
(歌) 田中館愛橘 (曲) 小松 清

この「花咲かば」の歌は、昭和21年11月10日、博士が東京へ旅立ちの朝、いつもお世話になっている 故小保内さくら氏(現呑香稲荷神社宮司 小保内道彦氏の祖母)にお礼として贈られたのに対し、即座にお礼の「返し歌」として詠まれたのが次の1首である。

\*花咲かば また帰りませ 故郷の 山川笑(え)みて 翁(おきな)迎えん  
(歌) 田中館愛橘 (曲) 佐藤綾夫

引き続き、ホールに於いて記念講演会が行われました。

講師は、歴史作家 星 亮一先生で、演題は「二戸の偉人 田中館愛橘」。

博士の生きざま、功績などにつき、るる述べられた後に、聴講者にマイクを向ける——というインタビュー形式を採用されたのには一見驚いたが——。不特定にマイクを向けて、博士に関わる気持・意見などを吐かせていかれたが、数名の方々が、全然たじろぐことなく、堂々と博士に対する思いやりやアイデアなどを吐露し、なかなかユニークな展開と思われた——。これも、或るいは地元ならではの風景かな?とも思われた——。

### § 田中館愛橘言行録 § 《その10》

博士の外遊時、会議が終わり、夫人同伴のパーティーが持たれた時に良く聞かれたセリフである。

お互い気のあたった同士が連れだってアチコチで懇談している。そんなときに博士が通りかかると、或るご夫人は隣の亭主に、ズケズケと「貴方はあっちへ行って——。Mr. タナカダーテ、いらっしゃい——」という風景がよく見られたという。

タネあかしをすると——。ほかでもないが、その様な場所での博士の対応がウィットに富んだというか、話術が面白いというか、はたまた、ブローウケン・イングリッシュに人気があったのかどうかは定かではないが、ご夫人にはエラク人気があり、引っ張り尻だったとか——。

これにはオマケが付いている。そのような時、同道の弟子さん達がそばにいくと「どうだい、羨ましいだろう——」と言ったとか言わなかったとか——。

(※創刊以来9号で止まっていました。)

## ——— 没後 60 年祭に捧げられた 祭 文 (要約) ———

※博士の生活に深く関わった経験を持つ方は、極めて少なくなっている現状と思われませんが、小保内氏は「ジカに深く知っておられる」最後のお一人では?とも祭しております。  
——博士に対しての切々たる敬愛・敬慕の念をおくみとり戴ければ——。

本日、我が国物理学の創始者とも言われ、文化勲章受章者であられる田中館博士の60年祭を執り行うに当たり、主催者を代表し謹んで祭文を奉呈申し上げます。

——中略——今博士の墓前に立ちますと60数年前の色々なことが思い出されます。

——博士は郷里に戻りますと、必ず毎日のように私の家の五右衛門風呂に通ってこられました。ぬるめの風呂にたっぷり時間をかけて入り、上がると常居で横になり、娘の美稲さんが身体をさすってあげるのが常でした。私は風呂の火を燃やす係もやりました。

——中略——博士がお亡くなりになる前年の9月の夕方、博士の家の前を通ったら書斎に明かりが付いていました。家に帰ると美稲さんがお見えになっており、そのことを言ったら、「ああ、お爺さんは調べることが一杯あるとってドイツ語の本を出して調べてるよ」と言われました。私は、「何才になっても学ぶことが大切なんだな」ということを教えられたような気持ちに強くさせられました。

——今から60年前の昭和27年5月21日、私は横浜の叔父の家に寄宿して学校に通っていました。突然父親から「博士が危篤だからすぐ行ってこい」と電話がありました。すぐさま、経堂の博士の自宅を訪ねることができました。玄関先に居ると運よく美稲さんが現れ「アヤー、よく来たこと、サァ入って」と枕元に案内されました。

博士は、酸素マスクをしていましたが、私をじっと見て、今にも何か話しかけたそうに思われました。夕方横浜に帰りましたが、ご逝去がニュースで報じられたことを知らされ頭をガンと叩かれたような気がしました。

人の命のはかなさに胸が痛くなり、もう少し博士のおそばにいてあげればよかった——と後悔しました。

——中略——博士がお亡くなりになる直前「50年後の夢」というエッセイを残されました。その終わりにこう述べています。「——今多くの国民が同じ人間たちを敵として戦うために、沢山の費用を掛けて軍備に励んでいる。これらを差し控えて、自然の敵なる地震、雨風の大嵐や津波などに向かって戦いを挑み、これを征服したらどんなに世界が楽になるだろう——中略」と書き添えてあります。これは地震学者でもあられた博士の厳しい警告であり、遺言でもあったと思っております。

——それから59年たった昨年3月11日、ご承知のように「東日本大震災」が発生し、尊い人命が多数奪われ、沿岸では壊滅的な損害を被りました。博士の警告にしたがって地震予知等にもっと真剣に取り組み、津波に強い街作りや防災対策を実施していたら——と残念でなりません。国民の生命財産を天災から守ることは、国家の責任でしてもらわなければ——と強く思わずにはおられません。

——中略——四季折々の風景が望まれるここ夕照山の、ローマ字のお墓に神鎮まります博士の御霊が、とこしえに平安でありますように、そして郷土の限りない発展と、戦争のない世界を、平和を、皆様と共に強くご祈念申し上げながら祭文と致します。

平成24年5月21日

田中館愛橘会 会長 小保内 岩吉

## 8. 教授時代の健康

その後東京にきて一橋の外国語学校に入ったが、まあ苦学生というものだろう。三田の聖坂から歩いて通った。夜明けに起きて冷や飯を食い、それから歩き出すのだ。後に、神田や九段の安下宿に移り、明治9年開成学校に入学してから寄宿舎生活をした。入学した当初落第しては大変と思い、むやみに勉強した。ところが大試験の結果を見るとA組の1番になっていた。が、このせいか身体具合が悪くなっていた。肺病になつてはならないと思ひ肝油を飲んだ。というよりも、食事のときに汁やお菜にいれて食べた。匂いは良くないが、鼻の感じを少しおさえて味わってみればなかなかよろしい。これを2年くらい続けた。土方寧博士は、私が丈夫になったのは肝油のせいだと云われたが、どうだかはわからない。だから、これは人には薦めない。胃の弱い人が腹下りでもしてはいけないから——。この頃の学生は随分暴食をしたものだ。「芳菲庵」という汁粉屋で、12ヶ月汁粉をみな平らげたことがあった。

また、この頃は旅行も随分とした。夏休みは必ず旅行にいった。国へ帰るにも150里の道を歩いて行き来したし、重力測定に富士山に登ったり札幌に行ったりした。富士山には前後4回登った卒業してからも学生と共に、研究で方々歩き回ったものだ。

その後英独の留学から帰って教授になってから講義に苦しみ、それが幾分慣れたかと思うと学生が増える。それなのに予算も教室の設備も増えない。その上、色々の委員会などいつかって忙しくてならない。生意気に研究もしたい、論文も書きたい。しかし、考えてみると、自分の能力が足りなくて忙しいのだと悲観したりして、ついに神経衰弱になってしまった。浜辺を歩いたり、水を漕いだり、山登りをなどして治したが、こんな鈍物が今時教授になっているべきではないと感じて、60の還暦をきっかけにお許しを願った。その年の暮れ、自転車で転んで左大腿部を折って3センチ程短くなった。幾分不自由だが歩行も座りも出来る。

その後も国際的な学会にも色々関係して数回欧米に行ったが、忙しいときは時々食事を抜かしたり、徹夜したりしたことも少なくなかった。

## 9. 今こそはわが時

最後に日常の心得方について一言——。「今こそは一番良いときだ。なぜなら、それだけがわが時だから」という諺がある。過ぎ去った昔はいかによかったと言え、時は川の流れ同様逆戻りをしない。また未来は実際に来なければ解らず、いたずらに狸の皮算用をしてもかえって狸に笑われる。この大切な未来を良くも悪くもするのは、今握っている、わが現在の図鑑の使いようである。「ああこうすればよかった、ああすればよかった」と思う時はもう過去になっていて、逆戻りしない。

しからは、いかにして未来の方針を決めるかと言えば、過去の経験にかんがみてやるほか無い。「古きを尋ねて新しきを知る」のである。その尋ねかたも日本国内だけではなく、広く世界にわたって尋ね、わが現在にくらべてかんがみなければならぬ。

※巻末に次のような付記がある。

「拙談拙著をお取り上げ下され、お恥ずかしい限りである。願わくは拙著『時は移る』その他についてくわしくお読みの上お叱り下されば感謝の至りです」

## 「50年後の夢」——の夢

※会報48号の「あとがき」欄に、余りにも異常現象が続いて…という感想みたいなものを少々長く書いた記憶がありますが、この度「手記」としてまとめましたので厚かましくも載せてみます。(事務局佐藤)

ふざけたような標題になったが、「」の中の「夢」は田中館愛橋博士(安政3年—昭和27年)が昭和25年頃にエッセイとして書き残した冊子の標題であり、400字原稿用紙で3枚チョットのものである。その大意は、19世紀末からの世界の科学技術の進歩発達が著しいことを実例を上げてざっと振り返りながら、結びとして次のように述べておられる(とどのつまりは、このことを訴えたかったのだろうとわたしは信じている)

「今多くの国民が、同じ人間達を敵として戦うために沢山の費用をかけて軍備に励んでいる。これらを差し控えて、自然の敵なる地震、風雨の大嵐や津波などに向かって戦いを挑み、これらを征服したらどんなに世界が楽になることだろう！シナの孔子は‘己に克ちて礼に復る’と仁の道を説いた。20世紀の人間たちもまだお若いかな？」(原文のまま)

その次の夢は、おこがましくも、私が或る晩にみた夢のことで、概略次の様なもの。2010年(平成22年、昭和85年)9月8日の晩に国連の内部組織として「異常気象特別研究委員会」を設置し、世界の第1級の科学者を動員して研究し、その災害を幾らかでも軽減することになったというニュースが流れた、私にすれば誠に次元の高い夢で、ゾクゾクするほど嬉しい限り——と思った途端に目が覚めてガックリ。でも、夢って素晴らしい贈り物だと、そのムードに浸っていたくて暫くは起きたくなかった。

この夢のキッカケになったのは、多分私胸中にあった次の3点だろうと思われる。

- (1) 昭和の初期、国際連盟(今の国連)の中に、文化的研究活動により世界平和を——という目的で「知的協力委員会」を設置して競技させた経緯がある。委員には、アインシュタイン博士、キューリー夫人、田中館博士を初め当時の第1級の方々12、3名が名を連ね、昭和8年頃まで続いた。
- (2) 毎年定期的にやってくる台風やそれに伴う災害・水害等について昨年も今年も会報で取り上げたことが根強く私の脳裏に残っていたのでは？
- (3) 夢を見た日の昼間、偶然「50年後の夢」の冊子を読み直していたこと。

博士が亡くなってもう50年になろうとしているが、博士の「夢」はまだ全然かなえられていないと思う。異常気象のもたらす自然災害については、人類はなすすべを知らず、ただ後始末に明け暮れる状態ではなかろうか。せめて台風の進行方向・強さ・降雨量等については、科学の力で探知したり、コントロールしたり出来たら、被害も最小限に食い止めることが——。

博士の言われるように、軍備に費やす資金の何パーセントかでも科学(異常気象)研究に投じたら人類のためのかなりの成果が期待できるのでは——と素人なるが故に、単純にそう思ってしまう。

博士は最後に「20 世紀の人間たちもまだお若いかな？」と茶化してはいるけれども、本心では「人類は、もっと賢くなり、見識もそなえ、思慮分別ある行動を取れるようにならなければ——。愚かなことはいけないよ」と一大警告を発したかったのでは——と思われるてならない。

……博士の「夢」は一刻も早く実現したいものである……

### ～愛橋会のホームページ公開～

田中館愛橋会のホームページが公開されました。会のページのアドレス (URL) は <http://www.aikitu-kai.info> です。愛橋会の最近の状況やこれまでの活動などについてお知らせしています。順次充実して参りますのでご活用ください。

また、田中館愛橋博士ホームページも新たに公開予定です。

博士のページアドレス (URL)

は <http://www.tanakadate-aikitu.info> です。こちらは「田中館博士の業績」や残された「資料」などについて調査研究した内容などを順次公開して行く予定です。お楽しみに。



## その後の歩み

5月21日 没後60年祭祈念行事実施

- \*墓前祭 (60年祭) \*第27回定期総会 \*特別セレモニー (神代神楽、女性コーラス) \*懇親会 \*記念講演会

~~~~~あ と が き~~~~~

\*本年度の総会資料をご覧になっておわかりのことと存じます、丹野幸男会長の席に、この度代わりまして副会長の小保内岩吉が会長に就任されました。宜しくお願い申し上げます。ご承知のように、丹野前会長は本会の発会 (昭和61年) 以来20数年にわたって本会の舵取りに尽力を頂き本当にご苦労さまでございました。皆様と共に厚くお礼を申し上げたいと存じます。今後は休養なさりながら、陰に陽にご指導して戴けるものと信じております。

\*訃報です。

故 黒澤繁治氏 東京在住 (5月)、 故 阿部克三氏 (5月) 心からご冥福をお祈り申し上げます。

**《会報のタイトルについて》**  
 \*写真は昭和19年4月、文化勲章受章の時のものです。  
 \*氏名、サインとも博士の自筆であり、サインは絵やローマ字の書き物をなされた時に主として記しており、両方とも印章にしているのがあります。

**《会報の発行について》**  
 \*年1回発行 \*編集者 佐藤幾夫 (事務局長)

**《発行所》 田中館愛橋会**  
 〒028-6103 岩手県二戸市石切所字荷渡55  
 二戸市シビックセンター内 ☎0195-25-5411  
 F 0195-23-3548  
 (振替口座) 02350-8-18841

**《印刷所》 沢倉印刷株式会社**  
 〒028-6101 岩手県二戸市福岡字城ノ外38 ☎0195-23-3107